

ギリシャにおける日本研究の過去と現在

ステイリアノス・パパレクサンドロプロス

ギリシャには現在、日本学科やアジア学科を持つ大学がありません。そのため、ギリシャの日本研究は、大学等の高等機関で行われる学問ではなく、個人によって推進されています。日本学科を作るための努力はこれまで多くなされてきましたが、残念なことにすべて失敗に終わりました。

本稿では、日本とギリシャ両国の関係を整理したうえで、日本学科設立のための努力とその失敗を振り返り、最後に日本研究を行った個人の歴史と学術活動について述べます。

一 日本とギリシャとの関係史

日本とギリシャの外交関係が始まったのは、1899年6月に日本が率先して“Treaty of Amity, Commerce and Navigation”という条約に署名した時でした。当時、ローマで署名した日本大使によれば、日本がギリシャとの外交関係を持ち始めたきっかけは、ロシアとの摩擦に対処し、ギリシャを黒海と地中海をつなぐダータネルス海峡の観察基地として使うためでした¹。日本がギリシャに初めて外交官を送ったのは1922年であり、ギリシャ駐在の日本大使館が設立されたのは1924年です。

第一次世界大戦時、日本とギリシャは同盟国でした。1918年に戦争が終わると、ギリシャは、戦勝国の一つである日本に、ギリシャ人が居住しているオスマン帝国の領土の獲得を支援してもらうために、東京に日本駐在のギリシャ大使館を設立しました。しかし、日本からの支援が実現しなかったこともあって、1922年にギリシャ大使館の業務を停止しました。

1 Maria Iosifidou. “Perceptions of Japan in Greece.” *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. 4 (2012), p. 87.

1939年にギリシャは再度、日本に大使を派遣しました。第二次世界大戦時、両国は敵国として戦ったので、1941年に外交関係は中断されました。終戦後の1960年、ギリシャは再び大使館を東京に設立して、外交関係を再開しました。それ以来、多くの条約が結ばれました。中でも、1981年3月に締結されたTreaty of Cultural Agreement between Japan and Greeceは、文化交流にとって非常に重要でした。その後、ギリシャでは日本文化を紹介するイベントが数多く実施されました。

二 日本学科の設立に向けた試み

ギリシャで日本研究が始まったのは最近のことです。昔から、日本文化に興味を持つギリシャ人は多くいました。第二次世界大戦以後、その人数はさらに増えました。例えば、武道だけではなく、日本の文学や映画に深い興味を持つファンは常に存在しています。日希協会のような組織は以前から設立されています。日本文学が翻訳され始めたのは1960年代です²。

それ以前に、ヨーロッパに滞在して日本文化についての知識を持ち、また日本の美術品を持つようになったギリシャ人は、その知識を自国に伝え、美術品をギリシャの博物館に寄贈しました。例えば、コルフ島のアジア博物館の一部はその寄贈で成り立っています。1970年代以降いろいろな目的で日本を訪問し、滞在したことのあるギリシャ人や、特に日本の文部省の奨学金で日本へ留学した人々は、ギリシャに帰国すると、日本文化を広める活動を始めました。

しかし、日本学という学問分野は、ギリシャでは最近まで知られておらず、全く見当もつかない人が多くいるのが現状です。一般人のみならず、大学を管理し、影響力を持つ教員や、ギリシャの文部省に勤務し、教科設立の決定権を持つ人々でさえも日本学を知らない人が多い。これが、日本学科の設立のための数々の努力が失敗に至った原因の一つです。努力した人たちは、決定権を持つ大学上層部の無知の壁にぶつかったのです。

2 Stylianos Papalexandropoulos. "Japanese Literature Translated into Greek: Past and Present," P.A. George, ed. *Japanese Studies—Changing Global Profile*. New Delhi: Northern Book Centre, 2010, p. 454.

不思議に思われるでしょうが、ギリシャはオスマン帝国から 1832 年に独立して以来、ヨーロッパに追いつくために、ヨーロッパの数多くの学問分野を導入してきました。ただし、必要と思われる分野に限定し、不要と思う分野は一切採用しませんでした。例えば、ギリシャでは宗教学はまだ神学部だけで教えられており、仏教のような大切な文化的産物を研究する人はギリシャでは非常に少数です。しかも、インド・中国・日本の歴史と文化は、人類の文明史の重要な部分であるにもかかわらず、ギリシャの大学では教えられていません。そのような科目を学習したがる学生は外国へ留学するしかありません。

そのような学問分野を取り入れない原因は、ギリシャがオスマン帝国に征服され、ヨーロッパから切り離されたために、ヨーロッパ諸国の対外膨張と植民政策に参加しなかったからです。独立してからも、ヨーロッパ以外の遠い地域の領土に対しては十分な興味を持ちませんでした。第二次世界大戦後、日本文化に対する関心はありましたが、教育には及びませんでした。

私は、1979 年から 81 年まで東京大学の末木剛博先生の下で、西田幾多郎の哲学について研究しました。ギリシャへ帰国した後、アテネ大学の神学部で「中国と日本の宗教」を教えることを任されました。これはギリシャの大学に導入された日本関係の唯一の科目であり、現在も教授されています。

ほぼ同じ時期にあたる 1982 年から 85 年まで、クレリ・パパパヴル（Claire Papapavlou）氏が、クレタ島の大学で東洋美術の科目を教えていました。パパパヴル氏はその後、国際交流基金の要請により、基金からの給与を受けながら、1994 年から 97 年まで、アテネ大学に設立された「外国文化学科」で日本文化を教えています。「外国文化学科」の設立は、日本学科の設立に向けた最初の本格的な試みでした。その学科では、日本文化の授業の他に、アラブ文化、イタリア文学、スペイン文学も教えられましたが、将来、それらの科目を独立させて、それぞれの学科に発展させる計画が立てられていました。私は「外国文化学科」からの依頼を受けて、無報酬で約 3 年間、日本文化を教えました。学生たちは、私の日本経験と新しい資料に基づいた講義を、とても熱心に受講してくれました。

しかし、残念なことに、「外国文化学科」のスペイン文学の担当者が全学科をスペイン関連の科目に変更したため、日本学は追い出されてしまいました。そこで私は、「日本文化」のコースを、「民衆の友の会」という自由大学のような

なところに移動させ、約 10 年間教え続けました。その「民衆の友の会」で私の後を引き継いでくれたのが、パパパヴル氏でした。現在も氏はそこで日本と中国の文化に関する様々な科目を教えています。

日本学科の設立に向けた第二番目の本格的な試みは、アテネ大学学長のイニシアティブで、2004 年にアテネ大学に「トルコ学と現代アジア学」という学科が作られたことです。「トルコ学」と「現代アジア学」を別々の学科として運営し、「現代アジア学」に日本学と中国学を入れる計画がありました。学長は「トルコ学と現代アジア学」の学科長も兼務しました。しかし、講義に相応しい教員が見つからないことを理由に、この学科を何年間も作動させないままにしまいます。私がアメリカ・ボルチモアにあるメリーランド大学のギリシャ系米国人研究者コンスタンティノス・ヴァボリス (Constantin Vaporis) 氏に連絡し、状況を説明したところ、氏はアテネで教えても良いと申し出てくれました。しかし、学長はそれを断りました。

その後の試みも、同じような態度を取った学長たちのために失敗しました。本当の理由は、適当な教員がいないということではなく、学長たちが学科をコントロールしたがっていたからだ、と、ほぼ確実に推定できます。コントロールとは、人間の上下関係のみならず、文部省から与えられる新しい学科のための補助金や、学科のスタッフに親戚や友人などを任命することも含みます。ギリシャの大学では最近までよく行われていたことです。そのため、日本学の専門家は、大学に招聘されないどころか、あたかも敵のように見なされ、本稿では詳細に書けないようなやり方で排除されてしまいました。ヴァボリス氏のような専門家が教えに来れば、学長は学科の責任権限を譲らざるを得ず、それに伴う利益をも失ってしまうでしょう。「トルコ学と現代アジア学」の学科長職はその後、ビザンチン文学を専門とする教授に委任されました。その教授はトルコ学を軌道に乗せましたが、アジア学を有名無実のままにしています。現在は地形学者が学科長を務めています。

アテネ大学に幻滅し、他大学の可能性を探っていた私は、中国に興味を持つキヴェリ・ヴェルニー (Kyveli Vernie) という、フランスの大学で経済を教えるギリシャ人にめぐり会いました。ヴェルニー氏は当時、イオニア海のコルフ島にあるイオニア大学の前学長に、「アジア学科」を設立すべきだと提案していました。イオニア大学で新しい学長が選ばれたのを機に、私とヴェルニー氏

はこの新学長にも同じ提案をしました。ヴェルニー氏は学科の設立に向けてある期間協力してからフランスに戻っていき、以後、私は一人で学長への協力を続けました。しかし学長は、コルフ島でも日本大使館を含む他の場所でも、新しい学科の設立を、彼一人の努力によるものと紹介し、協力者については一切言及しませんでした。そして、新しい学科の学科長も兼務していました。私はその態度に幻滅し、協力を諦めました。学長はまた、イオニア大学で教えたいというヴァポリス氏の希望を無視したため、氏もギリシャに来る意欲をなくしました。

学長は、当時の在ギリシャ日本大使と親しくなり、国際交流基金からの支持も得るようになりました。国際交流基金の代表者がコルフ島を訪れた際、私の名前については聞いたことがないと言っていました。学長が新しい学科のために教員を確保することができなかったことにより、ギリシャ文部省はその体制を不審に思い、国際交流基金が日本語の専門家の派遣を決めると同時に、文部省は経済危機の発生を理由に新しい学科を停止させています。

最近選出されたイオニア大学の新しい学長は、学科停止令の解除に向ける努力をしているようですが、アジア学科で勤務可能な人とまだ協議をしていないようです。前学長と同じやり方をするのではないかと思います。昨年、中国政府は学科停止令の解除に興味を見せましたが、ギリシャの文部省は依然、中国大使にも日本大使にも積極的な反応を示していません。

三 日本学の展開

日本研究を初めて行ったギリシャ人は、だいたいヨーロッパの留学先で日本研究に興味を持ち、日本を研究対象にした人たちです。最古と思われる研究論文は、Ahilleas Siagris 氏が書いた *Αμυντά: Ο νοσταλγούμενος θεός-σωτήρ* (阿弥陀—憧れの神・救世主) で、テサロニキの神学部にて 1953 年に提出された博士論文です。それに次いで古い研究は、アテネ大学神学部教授 Dimitrios Stathopoulos 氏が、ドイツ留学中に流行していた日本仏教、特に禅の活動に影響を受け、1969 年に提出した博士論文 *Η σχολή της άμώμου ή καθαρᾶς χώρας (Jōdo Shū) και ό ίδρυτής αὐτῆς Hōnen Shōnin ή Genkū (1133–1215)* (浄土宗とその宗祖法然上人あるいは源空 [1133–1215]) です。Stathopoulos 氏は 1971 年に、*Ο Ζενισμός (Zen Buddhism)*

- *Αρχαί, εξέλιξις, νόημα* (禅—その起源、展開、意味) という本を出版しました。Stathopoulos 氏はある時、ギリシャを訪問した浄土宗の僧侶と知り合い、その僧侶の招待によって日本を訪れました。そこで天理教の活動を知り、帰国後の1985年に、*Οὐράνια σοφία. Τὸ φαινόμενο τῆς «νέας» ἰαπωνικῆς Θρησκείας Tenrikyo* (日本の新宗教の天理教の現象) という本を出版しています。

Siagris 氏と Stathopoulos 氏が著した上記の本は、日本仏教をギリシャに初めて紹介しましたが、主としてドイツ語や英語の参考文献の内容をギリシャ語に翻訳しただけで、独創性に欠け、学術的価値は高くありません。しかし、二人とも神学部の関係者でしたから、ギリシャの日本学は神学部で扱う日本仏教の研究から始まったとは言えます。

異なる分野でより本格的な研究をしたギリシャ人は、上述したクレリ・パパバヴル氏です。氏は、カリフォルニア大学バークレー校において中国美術の専門家ジェームス・ケーヒル (James Cahill) 氏の下で東洋美術を学び、1975年に同大学から “The Haiga figure as a vehicle of Buson’s ideals: with emphasis on the illustrated sections of *Oku no hosomichi* and *Nozarashi kiko*” というタイトルの学位論文により学位を得ました³。パパバヴル氏は日本に短期間滞在したことはありますが、日本語は習得していなかったため、英語の資料と参考文献に基づいて様々な書物を著してきました。氏は、日本学の国際的発展と距離があるため、ギリシャでは学問としての日本学を推進していませんが、日本文学をギリシャに紹介した功績があります。例えば、2002年刊行の *Ποίηση και ζωγραφική στην ιαπωνική τέχνη* (日本美術における詩と絵) には、芭蕉の『野ざらし紀行』英語版からの翻訳が掲載されています。ドナルド・キーン氏の *Japanese Literature: An Introduction for Western Readers* を翻訳したのもパパバヴル氏で、日本学をギリシャで紹介する最初の契機となりました。氏は、ギリシャで生まれた小泉八雲をギリシャ人に紹介する活動も行っており、2002年に *Ο άλλος Λεγκάδιος Χερν – The other Lafcadio Hearn* というタイトルの本を刊行しています。

私は主に、専門分野である日本仏教に関する本や論文を書いています。ギリシャにおいては、以下に述べるマリア・コバニ (Mairy Kovani) 氏を除い

3 出版元は、Ann Arbor: University of Michigan Microfilms International Dissertation Service, 1981。

て、唯一日本語ができる日本学研究者で、EASJ のメンバーとして日本学の国際学会に参加し、日本の大学や日文研のような研究機関と連携関係を持ち、仏教のみならず国際的に研究されている日本文学や美術なども紹介してきました。私の博士論文は、1992 年にアテネ大学に提出した *Ο Ιάπωνας Φιλόσοφος Νισίντα Κιταρό – Προϋποθέσεις για τὸν προσδιορισμό τῆς βουδιστικῆς του ταυτότητας* (日本の哲学者西田幾多郎—その哲学と仏教との関係をめぐって) です。西田哲学は、禅の哲学的な表現だという当時の定説に反し、禅より広く東洋の哲学を取り入れたものだと主張しました。この論文は、一次資料を重視する学術上の規則に従い、ギリシャで最初に日本語原文の資料を使った研究であり、ギリシャに日本学を紹介した本格的な論文だと言えるでしょう。

当時、神道に関するギリシャ語の書物は全く存在しなかった一方、国際的には宗教学の中で多神教や神話などへの興味が高まっていたことを背景として、1994 年に国学院大学の研究者や、大林太郎氏・吉田敦彦氏など日本の比較神話の代表的研究者らと連携し、1997 年に *Θεότητες καὶ κόσμος στὴν κοσμογονία τοῦ Κοτζίκι* (『古事記』の創造神話における神々と世界との関係) という本を刊行しました。この中で、『古事記』では、国産み神話にある〈産む〉ということよりも fragmentation という作用を経て世界が創造されたことを指摘しました。

2000 年、日本仏教の研究に戻り、東京大学の末本文美士教授の指導下で、道元の研究を始めました。同時に、松本四郎氏・石井修道氏・石井清純氏など、駒沢大学の研究者とも共同研究を行い、帰国後も彼ら日本人研究者との提携関係を続けました。その研究成果として、*Η ἀληθινή πραγματικότητα στὸ ἔργο τοῦ Ντόγκεν* (道元における真実の概念) という本を出しました。この中では、道元の思想に対する私の解釈を試みました。後に、私の観点をいろいろな論文の中でさらに展開しました。私は、道元の思想からある部分や概念だけを取り出して禅師の思想を理解するアプローチを取らず、道元の哲学を構成する様々な要素を全体的に見渡し、概念間の相違と矛盾が何故、道元の中で共存しているのかを解明しようとしています。そうすることによって、道元の深遠な思想が理解できるのではないかと考えるからです。

私は日本の仏教美術に深い興味を持っています。日本仏教との関係について近年書いた本は、2007 年出版の *Ιστορία τῆς τέχνης τοῦ Ἰαπωνικοῦ Βουδισμού (552–794 μ.Χ.)* (日本の仏教美術史 [552–794 年]) です。現在も道元の研究を続け、

道元の「伝法」などの概念について論文を書いています。その他、私は日本文学にも興味を持っており、志賀直哉の短編を数多くギリシャ語に翻訳しています。また、上田秋成の『雨月物語』（4巻）と安部公房の『砂の女』なども翻訳しました⁴。

ギリシャにおける日本学の将来は憂慮すべきです。ギリシャ国外で日本学に取り組むギリシャ人はいますが、国内には日本学科が存在しないため、私やパパザル氏はごく少数派の研究者です。他に日本に留学し、日本語ができる研究者としてはマリア・コバニ氏が挙げられます。コバニ氏は一橋大学に2011年に提出した論文「イソップの寓話における翻訳の問題」で博士号を取得しました。現在、アテネ大学の「クラブ」というところで日本語を教えており、学術研究を続けることと思います。日本研究の人材の少なさ、人材育成の難しさという点で、ギリシャの日本研究は危機的状況にあると言えます。

4 私の著書・論文は、Scribd. Papalexandropoulos.com で閲覧できます。